第1回（だいいっかい）

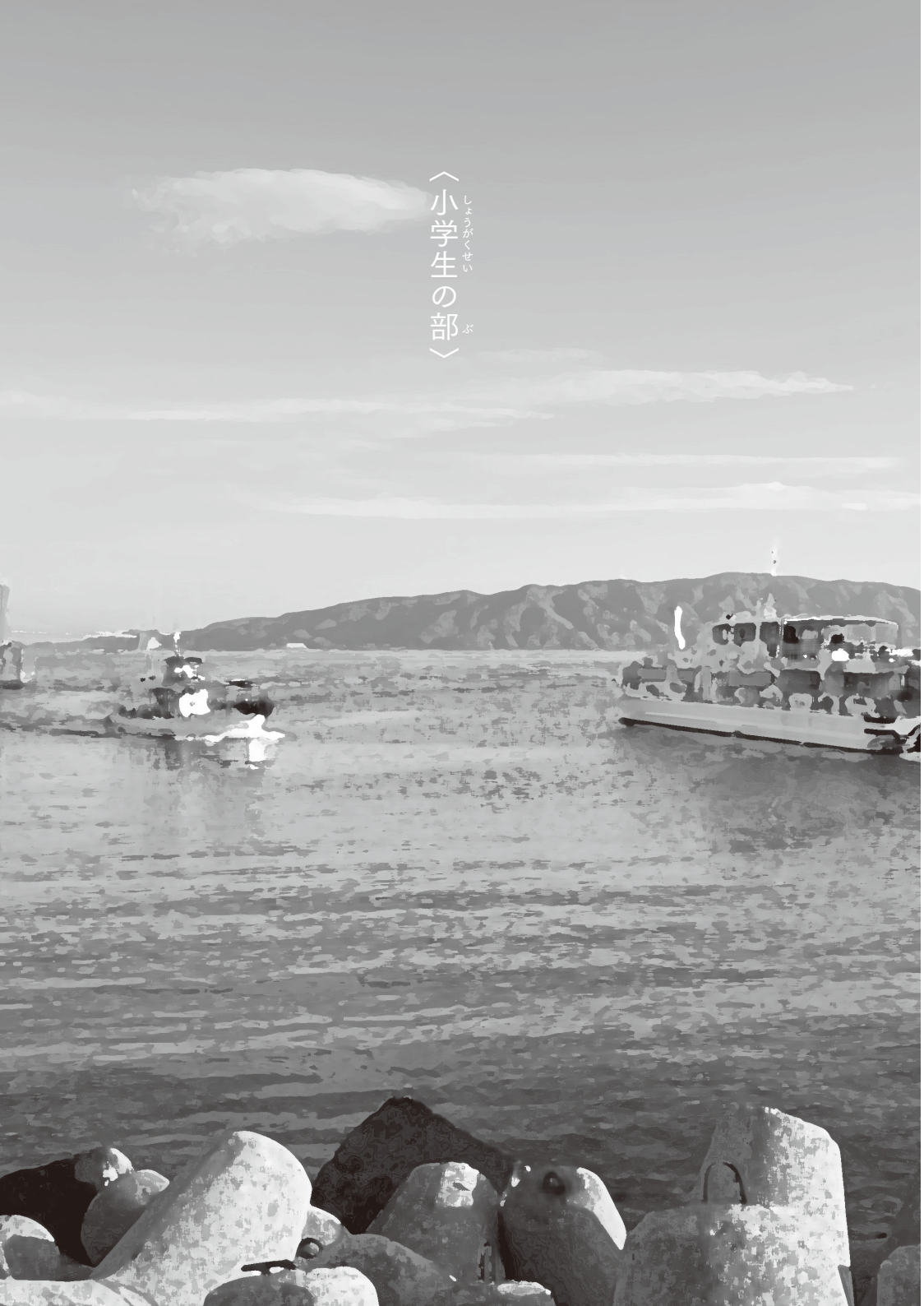
こども海（うみ）の文学賞（ぶんがくしょう）

作品集（さくひんしゅう）

明石（あかし）うら
ぎょきょうの
たんけん

目次

〈小学生の部〉
最優秀賞
「明石うらぎょきょうのたんけん」明石市立明石小学校 一年　三和 倫太郎 …… 6
優秀賞
「海の色」高槻市立芥川小学校 二年　向井 麻夏 …… 14
「貝がら大そうどう」神戸大学附属小学校 二年　中林 風和 …… 16
「魚を三枚におろした」神河町立寺前小学校 六年　高橋 欧雅 …… 20
入賞
「魚を買おう！」長岡京市立神足小学校 二年　張田 知華子 …… 22
「大すきなひょうごのうみ」明石市立高丘西小学校 一年　境 香陽 …… 25
「鯛との戦い～漁業関係者の努力～」明石市立花園小学校 四年　中村 幸太朗 …… 27
「私の大好きな海」神戸市立義務教育学校港島学園小学部 三年　谷吉 英恵 …… 34
〈中学生の部〉
優秀賞
「アカウミガメの故郷、明石」滝川中学校 二年　岸田 航 …… 40
入賞
「海学で手に入れたもの」成城学園中学校 一年　峯岸 泰希 …… 45
「出会いに感謝を。」ゆい …… 54
「僕が好きな海」明石市立衣川中学校 三年　毛利 勇真 …… 58
〈選考委員講評〉
最相 葉月 …… 64
たなか しん …… 67
〈あとがき〉
明石おさかな普及協議会会長　川﨑 喜昭 …… 70



〈小学生の部〉

明石うらぎょきょうのたんけん

明石市立明石小学校 一年
三和 倫太郎

「カラカラカラカラカラン」たかくてするどいかねの音がひびいて、十一時に明石うらのせりがはじまった。木のはこに入った大きなサワラがすべってくる。せり人が前に立って、きんぞくのぼうでドンドンとリズムをつけながら、じゅもんみたいなことばを言っている。すぐに魚やさんたちが、しゅわみたいにゆびでいろんなかたちをつくって見せる。きづいたら、もうつぎの魚、そのつぎの魚のせりになっている。みんなこわいくらいのいきおいで、とてもはげしくて、ぼくはドキドキした。

なつやすみがあとすこしでおわってしまう八月二十三日、ぼくはおかあさんといっしょに、明石うらぎょぎょうきょうどうくみあいの見学にきた。ずっとたのしみにしていたので、うみの方にじてんしゃをこぎながらワクワクした。すこしまよって、ギリギリセーフではじまりのじかんにまにあった。はれていてとてもあつかったので、あせびっしょりだった。

まず、二かいのへやで、明石うらぎょきょうのくみあいちょうのえびすもとさんのはなしをきいた。明石のうみでとれる魚のこと、せりのほうほう、せりを見学するときにちゅういすることなど、しらないことがたくさんあった。明石のうみでとれる魚は、魚やさんやスーパーで見たり、いえでたべたりしている魚が多かった。でも、「明石のしゅん」があって、ほかのところとはちがうこともあるのはしらなかった。せりのことは、しらないことばかりだった。せりをみるのははじめてなので、どんなところでどんなかんじなのか、この時はまだよくわからなかった。でも、むずかしいゆびのあんごうがあることと、せりのじゃまをしてはいけないことはわかった。

そのあと、いよいよせりの見学だ。えびすもとさんといっしょに外に出ると、たくさんのトラックがとまっていた。ながぐつをはいたおじさんたちが、だいしゃで水色のかごをはこんでいる、フォークリフトもうごいている。どんどんあるくと、おふろみたいな大きなはこに水がジャバジャバ入れられてあふれていた。「そろそろせりの時間だからいきましょう。」と言われて、せりのばしょにいく。まっかなガシラがいっぱいはいったかごの間をとおって、水びたしのみちをとおって、みじかいかいだんにのぼった。そのしゅんかん「カラカラカラカラカラン」とかねの音がひびいて、せりがはじまった。せりをすすめるやくの人を「せり人」という。せり人が前に立って、まわりには魚をうごかすかかりの人と、せりのきろくをするかかりの人がいる。魚の台がまん中にあって、

せり人とむかいあったきんぞくのかいだんにたくさんの魚やさんがならんで立っている。ぼくは「入学しきで、みんなでならんでしゃしんやさんにしゃしんをとってもらった時みたいだ」とおもった。たのしみにしていたせりの見学は、すごいはくりょくで、きんちょうした。せりのばしょは「せりば」、せりをしているだいは「せりだい」とよばれる。せりだいの右から木のはこに入った魚が出てくる。さいしょに出てきたのは、ぎんいろのサワラだ。大きくてギラッとひかっている。せり人が「てかぎ」というきんぞくのぼうでせりだいをドンドンとならし、リズムをつけながら、じゅもんのようなことばを言っている。すぐに、かいだんに立った魚やさんたちが手をあげて、しゅわみたいにゆびで形をつくる。これは、魚のねだんをゆびで言っているそうだ。ぼくも、ゆびでするじをつくるほうほうをおしえてもらったけど、むずかしくておぼえられなかった。ぎんいろのサワラ、ぶあついハマチ、ぼくのかおよりもっと大きいカレイ、まっかなガシラ。しんせんな魚がどんどん出てくる。おじさんたちはみんなしんけんで、大きなこえで、すごい早さでじゅもんを言ったり、しゅわをしていた。ぼくは、きんちょうして、じっと立って見ていた。えびすもとさんが、「つぎのグループにこうたいしましょう」と言うのがきこえて、ほっとした。あとで、おかあさんが「あのせり人のおにいさんは、せり人の一年生なんだって。」と言ったのでびっくりした。一年生ということは、せり人になってすこししかたっていないし、まだべんきょうのとちゅうということだ。ぼくも一年生だけど、あんなふうにみんなの前で、どうどうとなにかをするじしんはない。しつもんしたいことがいっぱいだ。今日のせりでいちばんたかかった魚はマコガレイで、一ぴきで二万円だったそうだ。

つぎは、せりばのよこにある「プール」の見学をした。「プール」は、学校のプールとはぜんぜんちがう。コンクリートのゆかで、水色のはこがぎっしりとならんでいて、はこのうえに水色のバケツがのっている。バケツには、魚とかい水が入っている。生きている魚もいるし、しめられた魚もいる。ゆかはかい水があふれて水びたしだ。魚たちはならんで、せりのじゅんばんまちをしている。明石うらでは、魚を生きたまませりにかけるので、しんせんな魚をさかなやさんがかうことができるそうだ。プールには、体ぜんぶがながぐつみたいな、ズボンとエプロンががったいしたようなふくをきているおじさんやおばさんが水の中をバシャバシャあるいている。「おとうちゃんがうみでとった魚を、おかあちゃんがはまでうるというやくわりぶんたんが、むかしからあります。」とえびすもとさんがおしえてくれた。水色のはこのよこで、おばさんたちがおしゃべりしていた。すぐそばで、すごいはくりょくのせりをしているのに、ここはのんびりしているように見える。魚も人も、うみでりょうの時にがんばってたたかって、このあとのせりのじゅんばんがくるまで、「プール」できゅうけいしているのかな。今日は天気がよくて魚がいっぱいとれたから、プールにはたくさん魚がいるんだそうだ。うみがあれて、魚があまりとれない日もある。今日がはれてよかった。

見学をした八月二十三日は、さいこうきおんが三十六どのもうしょ日だった。プールやせりばのゆかは水びたしで、ぼくのくつもすこしぬれた。あつかったし、すぐにかわいたから気にしなかった。でも、いえにかえってから、もしさむい日もプールが水びたしだったらつめたいだろうなとおもった。さすがにふゆは水はながさないのかな。でも魚はかい水がなかったらよわってしまうのかな。しつもんしたかったけど、あとからきづいたので、おかあさんに言うと、えびすもとさんにメールでしつもんしてくれた。すると、「ふゆでもおなじようにゆかに水がたくさんあります。さむくてつめたいです。」とすぐにへんじがきた。魚を生きたまま、魚やさんやたべる人にとどけるために、

たいへんなくろうがあるのがわかってびっくりした。

プールを見学しているとき、タコとタイをさわらせてもらった。まずはタコ。ゆかに出されたタコは、ものすごい早さでうみの方にスルスルスルっとあるいてにげだした。すべっているみたいに、八本のあしを上手にうごかしている。さわるとヌルヌルとろとろで、スライムみたいだった。きゅうばんはかたくて、あしや体はふにゃふにゃにやわらかくてぜんぜんつかめない。ゆでたタコはプリッとしているのに、生きているタコはやわらかくて、ふしぎだと思った。タコは、りょうしさんがタコつぼをしかけてつかまえていると思っていたけれど、じつは明石ではタコつぼりょうはほとんどしていないことをはじめてしった。そこびきあみりょうでとっているそうだ。タコは、ぼくたちがみんなでがんばってつかまえようとしてもぜんぜんつかまえられなかった。でも、えびすもとさんがひょいっとつかまえて水そうにもどしてしまった。あんなに上手にタコをつかまえられるなんて、めちゃくちゃかっこいい。つぎはタイ。タイはしめられていたので、うごかなかった。体じゅうにびっしりとうろこがあって、かたかった。えらのうしろに、ひらひらした赤いひもみたいなのがついていた。口にはとがったはがたくさんあって、したもみえた。タイのうろこが一つ、ぼくの手についた。タイは赤いのに、うろこはとうめいだった。赤いかわのタイが、とうめいなうろこのふくをきているみたいでおもしろいなと思った。

明石うらでせりにかけられる魚のうち、明石のおみせにいく魚は、三十パーセントくらいだそうだ。ほかの魚は、とうきょう、なごや、おおさかにおくられる。ほっかいどうやきゅうしゅうにはこばれる魚もいる。明石のおいしくてしんせんな魚は、日本ぜんこくでたべられているんだな。そんなとくべつな魚を、すぐにかってたべられるなんて、明石にすんでいるぼくはしあわせだ。もっともっと日本の人みんなに、明石の魚のおいしさをしってもらいたい。でも、そうすると人気がでて、ぼくがたべる分がへってしまうのかな。

さいごに、りょうしさんや魚やさん、せり人にしつもんをさせてもらった。ぼくが一ばんきょうみしんしんだったのは、せり人一年生のいとうさんだ。もともとせりにきょうみがあったから見学会にきたし、ぼくもおなじ一年生だから、きいてみたいことがたくさんあった。せり人のいとうさんは、せり人になる前はせりのてつだいなどをしていたそうだ。せりばに魚を出したり、魚のかごをせいりするしごとだ。せり人のすがたがかっこよかったからせり人になったそうだ。半年かかってせり人のべんきょうをして、今もしゅうに三かい、二十分ずつべんきょうをしているとおしえてくれた。ふっきんとはいきんをきたえて、大きなこえを出すれんしゅうをしたりもしているそうだ。たくさんの魚やのおじさんたちの前で、あんなにどうどうとせりができるのは、きっといっぱいべんきょうしているからだと思っていたのに、ぼくの方がべんきょうじかんがながくて、びっくりした。大人はべんきょうのじかんがみじかくても、いろんなことが上手ですごいなと思った。いとうさんは、あさ九時にせりばにきて、りょうしさんのてつだいで、ふねから魚をおろしたり、プールにはこんだりする。十一時からせりをする。せりのあとは、ぎょきょうがかった魚のしゅっかじゅんびをして、せりばやプールをかたづけて、ゆうがた四時半にしごとがおわる。水よう日と日ようは休みで、休みの日はつりに行っているそうだ。魚が大すきなんだなと思った。せりの時に言っていたじゅもんみたいなことばのひみつをおしえてもらった。あれは、せり人がきめた魚のねだんや魚のとくちょうを手とこえで魚やさんにつたえていたそうだ。「つり（でとれた魚）やからきれいやで」とか「ごちあみの魚やで」とか、魚やさんがねだんをつけやすいように、魚のことをすば

やくおしえなければいけない。だから早口になって、じゅもんみたいにきこえるようだ。せり人をしていてむずかしことは、魚のねだんをきめること、たのしいことは、せりで魚のねだんがどんどん上がっていくこと、とおしえてもらった。せり人によって、同じ魚でもねだんがちがうことがあるらしい。せり人もテクニックがあるんだな。いとうさんが二年生や三年生になって、せりがもっと上手になってしまったら、魚がたかくなって、ぼくがたべている魚のねだんもあがってしまうのかな。それはこまるな。

見学がおわってかえるとき、いとうさんがりょうしさんたちと、かんコーヒーをのみながらたのしそうにしゃべっていた。りょうしさんやせり人やおさかなやさんは、ともだちとどんなはなしをするのかな。いとうさんはせりの時、はげしくてこわいくらいのいきおいで、きびしいかおをしてじゅもんを言っていた。でも、ぼくのしつもんにこたえてくれた時やともだちとはなす時は、やさしそうでにこにこわらっていた。大人がしんけんに、見学にきたぼくたちのことなんてかんけいなく、いつもとおなじようにしごとをしているのを、あんなにちかくでじっと見たのは、はじめてかもしれない。ぼくのおとうさんも、しごとの時には、あんなにしんけんでかっこいいかおをしているのかな。こっそり見てみたいな。ぼくは大人になったら、いとうさんみたいに、しんけんにたのしそうにできるしごとがしたいと思った。

明石うらぎょきょうの見学は、たんけんみたいだった。ドキドキわくわくして、はじめてしったことやかんがえたことがたくさんあった。ぎょせんの中を見学したこと、のりのようしょくのはなし、りょうのほうほう、りょうしさんにきいたはなし、ほかにもたのしかったことやもっとしりたいことがいっぱいだった。ぎょきょうのたんけんは、ぼくのなつやすみさいごの、さいこうのぼうけんになった。

つぎの日、おかあさんといっしょに、うおのたなに魚をかいにいった。ハマチやカレイやガシラ、シタビラメ、ヒイカ、タコ、アナゴがざるに入ってうられていた。魚やさんのおじさんに、「せりとぎょせんを見学してきたんです。」とはなすと、すこしせりのことをおしえてくれた。せりで、魚やさんが「ぜったいかいたい」と思ったら、ひじをまげて、ぐいっとひきよせるみたいに手をうごかしてアピールするそうだ。「ちょっとでもおくれたら、おそい！ ゆうて、おこられるんやで」とふじながせんぎょてんのおじさんはわらっていた。あんなに早口でせり人がはなすことをきいたり、魚のことを見てすぐにかうかかわないかをきめたり、ねだんをつけたり、いちどにいろんなことをしなければいけない魚やさんはたいへんだ。ぼくは、きっとせり人や魚やさんは、さんすうがとくいで、すごくあたまと目と耳がいい人たちなんだと思った。魚やさんにならんでいる魚が、いつもよりももっとおいしそうに見えて、大きなシタビラメを二びとハマチを一びかってもらった。

きょうも、マンションのベランダからうみにうかんでいるふねがたくさん見える。あのふねには、はなしをきかせてくれたそこびきあみりょうしさんがのっているのかな。あっちのふねは、小さいから一人のりのつりぎょせんかな。きょうはどんな魚がとれたのかな。ぎょせんのいけすにいっぱいとれていたらいいな。プールには水色のかごがずらあっとならぶんだろうな。せり人一年生のいとうさんは、きょうも十一時からしんけんなかおでじゅもんを言ってせりをするんだろうな。いつも見ていたうみだけど、ぎょきょう見学に行った日から、まえよりもいきいきしているみたいに見える。いせいのいいこえがきこえてきそうな気がする。ぼくは、今日も明石のおいしい魚をもりもりたべて、明石のぎょぎょうをおうえんしたい。

さんこうぶんけん
「目で見る明石のさかな」
やまさききよはり　ちょ　こうべしんぶんそうごうしゅっぱん
山嵜清張著　神戸新聞総合出版センター

海の色

高槻市立芥川小学校 二年
向井 麻夏

私は8才の女の子です。高つき市立あくた川小学校に通う小学2年生です。私は生まれた時からほぼ目が見えません。色は分かります。だけど海の色だけはなぜか白色に見えます。なぜみんな海の色を青色というのだろう。ずっとふしぎでした。

去年の夏休みに家ぞくで和か山県へおはかまいりにいきました。おはかの場所は、海が近いよとお父さんが教えてくれました。そしてお父さんから「海で、パラグライダーできるみたいだけど、やってみる？」と聞かれました。「パラグライダー？ 何それ？」と聞いたら「空を飛ぶスポーツだよ」とお父さんが教えてくれたので、なんだかワクワクしてやってみたいと伝えました。「空から海を見たらもしかしたら青色に見えるかも」とお母さんが言いました。

一緒に空をとんでくれるお兄さんがやってきました。「カバン、重いけどせおえる？」と聞かれたので、「うん」と言いました。せおうといつも学校にもっていくランドセルと同じくらいの重さでした。そのあとすぐに、工事の音みたいなブーンという音が鳴り体がビクっとなってしまいました。「今の音、何？」お兄さんに聞くと「空を飛ぶためのエンジンのおとだよ」といわれ、私は集中できるかとても不安でした。なぜなら「このかばんの中には何が入っているのだろう」「そもそもエンジンって何だろう」「どうやって空を飛ぶんだろう」「海は青いのかな」と聞きたいことがいっぱいになってしまったからです。「出発するよ」と、お兄さんからいわれました。ブーンという音とともに体がふわっと浮きました。空の上はとても冷たくて、冷とうこのように寒く感じました。すごく速いスピードでまるでジェットコースターみたいでした。下を見ると、青い色が見えました。お兄さんが「海の上を飛んでいるよ」と教えてくれたので、海の色が青色だとわかりました。「青い海だ」なんだかうれしくなりました。

近くでみたらうみは白いのに上からみたら青い色にかわることをわたしは今日勉強できました。

貝がら大そうどう

神戸大学附属小学校 二年
中林 風和

わたしは海が大好きです。海の生きものも大好きです。ですが、わたしには海の生きもののせいで、とてもとてもこわい目にあった事が一どだけあります。今からその事をみなさんにお話ししたいと思います。

ある日、わたしは海がんへあそびに行き、お父さんと宝さがしをしていました。するととってもかわいい貝がらを見つけて大よろこび。よく見るとそこら中いっぱい！ わたしは見えるかぎりひろって、大切に家にもって帰りました。

あらってかざろうと、せんめんきに水と入れてお風ろ場において、おトイレに行きました。帰りの車でがまんしていたから大急ぎでした。おトイレから、ほおおっとしながらもどってくると、お風ろ場から、

「カサカサカサ、カサササ、カサ。」

というきみょうな音が聞こえてきました。お風ろ場をそおっとのぞくと

「ぎゃあああああああああああああああ。」

「お母さあああん！ へんな虫いいいい。」

わたしはひめいをあげてしまいました。なぜかって？ だって、せん面きの中から足が生えた小さな虫が、いっせいに外へ出ようとしていたんだもん。するとお母さんが、

「えー、ごきぶり出ちゃったの！ お父さあああん。」

と、お父さんをつれて来ました。わたしはこわくて、見ないようにして、お風ろ場のすみっこに、いそぎんちゃくのようにはりついていました。すると、お母さんが、

「なあんだあ、やどかりちゃんじゃん。」

と大わらいを始めました。

「えっ？ やどかり？ やどかりってなにそれ、だれそれ。」

わたしはキョトンとしてしまいました。そして、ちょっとはずかしくなって、顔をまっ赤にしてしまいました。

「知っ知ってるもん。」

と、はずかしかったので言ってしまいました。

でも、そのころは、やどかりについて何も知らなかったのです。本とうは。

「さあ、きゅう出！ きゅう出！」

お母さんが一ぴきずつたすけはじめました。

「ほら、ふうなも！」
と言われ、やってみました。が、チクッとかまれた気がして、ほうり出しそうになりました。でも、がまんしていたら、コロンとかくれてしまったり、チョミンと出て来たりして、とてもかわいくなってきました。わたしは、それをかいたくなってしまいました。
「お母さん、かってもいい？」
と聞いてみました。でもお母さんは
「だめだよ。うちにいたら死んじゃうよ。海のおうちに帰らせてあげようね。」
と言いました。
　もうまっくらな夜だったので、お父さんが一人でもどしに行ってくれました。でも、わたしもどうしてもバイバイがしたかったので、スマートフォンのビデオで帰っていくところを見せてくれました。すなはまにおろすと、チミチミ、チミチミ、チミチミ、と海の中へもどっていきました。とてもうれしそうに見えました。わたしはほっとしてねることができました。その日は、ゆめもやどかりのゆめを見た気がします。
　やどかりのことが大好きになったので、わたしは、やどかりちゃんのことを調べてみることにしました。そうすると、びっくりすることがわかりました。なんと、やどかりのからはかり物だったのです。わたしは生まれた時から自分でもっているのだろうと思っていました。しかも、かり物の貝がらを、なんとなんと、何回も取りかえるのです。取りかえる時は、はさみでぴったりサイズかどうかを自分ではかるのです。おどろきました。なんでそんな事をするんだろうと思いました。それは、おなかがやわらかいから、守るためだそうです。かたいパンツみたいなものなのかなあと思いました。
　それからわたしは海へ行くと、やどかりをさがすのが楽しみになりました。でもある時行った海にはやどかりがいませんでした。
「なんでいないのかなあ。」
と、お母さんにぶつぶつ言いました。
「ここの砂は、よそから持ってきているって聞いた事があるけど、だからかなあ。」
と、お母さんもよく分からないようでした。
　わたしは、何か分からないかなあと、調べてみました。やどかりは生ぞん競そうがきびしいという事が分かりました。やどかりが生きていくためには、自分の食べ物だけじゃなく、貝がらがひつようなのです。だから貝がらが足りないと、やどかりどうしでとり合いになってしまうこともあるし、なくて死んじゃう子もいるのです。ということは、貝がいないとだめなのです。なぞがとけました。そこには貝もいませんでした。だからやどかりもいなかったのです。
　わたしは、海もやどかりも貝も大好きです。
　だから、やどかりや貝がたくさんいるすなはまがたくさんある海が、ずっとずっといつまでもいつまでもつづきますように。わたしも自分ができることをいろいろたくさん考えていこうと思います。
　わたしの
「やどかり大そうどう」
のお話でした。
　みなさんも貝がらをおうちにもってかえる時は、気を付けてくださいね。

さんこう文けん

「なぜなぜベストずかん5 みずべのいきもの1」
はっ行しょ　学研
さんじゅうよん　さんじゅうご　ごじゅうろく　ごじゅうなな
三十四、三十五、五十六、五十七ページ

魚を三枚におろした

神河町立寺前小学校 六年
高橋 欧雅

家庭科の授業で魚を三枚におろした。

魚のさばき方を吉岡さんに教えてもらってからさばいた。

まず、うろこを取って、きれいにするのが難しかったけど、だいたい取れてから、ぜいごを取るのがもっと難しかった。かたかったし、身を削らないようにするのが至難のわざだったのだ。だけど何とかきれいに取れた。

次は、頭を取るのだ。出刃包丁で切るのは、ちょっと気持ち悪かった。でも何とかできた。内臓を取るときは、魚のおなかに出刃包丁を入れて、切っていく。おなかを切ったら、中に入っているものを手で取りだす。とうとう

「気持ち悪う。」

と言ってしまった。全体を水で洗って、ペーパータオルでふいて、きれいにしたときはほっとした。

さあ、今からが、三枚おろしの始まりだ。できるかなあ、でもやるしかない。

まず、背中に出刃包丁を入れて、ゆっくり、骨に当たるまで切った。

「ふうっ。」

反対側も同じようにやって、最後に切って、一枚目だ。腹側から切っていって、終了と思ったら、腹骨をすいて終わり。腹骨をすくとき、慎重にしないと、身を削るので、ゆっくり、ゆっくり、慎重に、慎重にと心の中で唱えながら、出刃包丁を進めていった。

「はあっ。」

やり遂げたときには、ため息が出た。初めてにしてはうまくいったような。

角バットに班の子のと一緒に入れて、塩コショウをふった。三枚におろすのに比べるとフライパンで焼くのは簡単そうに思える。

油を入れたフライパンに身の付いた二枚をそうっと入れると、ジュッといい音がした。皮の付いた方から先に焼くのか、身の方から先に焼くのか、どっちだったか、と思ったけど、まっ、いいか。

「ひっくりかえしたらいいんとちゃう。」

と言われて、フライ返しを持った。きれいなまま、そのままひっくりかえすのも案外難しい。見ているだけだったら、簡単そうなのに、自分ですると、思い通りに魚が動いてくれない。でも香ばしいにおいがどんどんしてきて、気分はいい感じだ。どうにかこうにか、二枚とも焼いてお皿に入れた。

おいしそうだ。ぼくがさばいて焼いたんだ。班の子全員が焼いてしまうまで待った。絶対おいしい。みんな早く焼いてくれと思いながら、家でもさばけたらいいなあと考えていた。

魚を買おう！

長岡京市立神足小学校 二年
張田 知華子

わたしは、魚市場についてしらべました。まず、いまあまり魚が市場に入ってこないそうです。つぎに、魚のねだんが高くて売れないそうです。そして、魚をさばくことができない人が多いそうです。

どうしたら、いろいろな人が魚を買ってくれるのだろうか。

わたしのお父さんは、京と市中おう市場で、はたらく人がはたらきやすくなるしごとをしているそうです。市場ではたらくいろいろな人がしごとをしやすいようにサポートしているそうです。

市場を見学できないので、お父さんにインタビューをしました。

市場には、魚・野さい・くだものがあつめられていて、スーパーなどに売られているそうです。

スーパーの人が、市場の仲おろしさんからスーパーにはこぶそうです。

市場では、おろしさんがぜん国から魚などをあつめているそうです。

仲おろしさんは、おろしさんから魚をうけとるそうです。

市場には、市場の人のための食どうがあるそうです。

市場は、24時間あいているそうです。

魚は、ぜん国のみなとや外国からもあつめられるそうです。

お母さんにもインタビューをしました。

オレンジページなどのざっしに魚りょうりがのっているときや魚うり場に「おすすめ」「おいしい」とポップがついているときに買うといっていました。

イシダイやアイゴやカワハギなど、すきな魚があまり売っていなくてかなしいと言っていました。

なんと、お母さんは、魚をさばけません。

では、どうしたら、いろいろな人が魚を買ってくれるのだろうか。わたしは4つの方ほうを考えました。

1つ目は、たとえば、魚を1ぴき買ったごとにシールやスタンプをもらえて、それを10こためたら、ハンカチやノンアルコールビールなどと交かんしてもらえて、20こなどにするとしょうひんもちょっと高きゅうになるようにしたらいいと思います。お楽しみをつけたらいいと思います。理ゆうは、楽しいしワクワクするし魚をがんばって買おうという気もちになるからです。

2つ目は、「もうさばいてあるよ」とか「ほかのスーパーには売っていないよ」とか「めちゃくちゃおいしいですよ」とか「大人気です」というポップをつけて売るのもいい方ほうだと思います。りゆうは、ポップがついていると、味や食べたときの気もちが分かるからいいと思います。また、いまみんなのすきな魚が分かるからとてもいいと思います。

3つ目は、わたしは、お肉がきらいです。でも、友だちはみんなお肉が大すきです。だから、魚が買ってもらえません。そこで、サンマのしおやきやタイのしおやきのように、しおのかかったちょっとしょっぱい魚がめちゃくちゃおいしいということを、お肉ずきにつたえるのもいい方ほうだと思います。りゆうは、じっさいに食べてもらえば、魚がめちゃくちゃうまいことがつたわるからです。見た目ではなく、味できめなくてはいけないからです。

さいごの4つ目は、お肉の入れものよりも、魚の入れものをゴージャスにしたり、魚の形にするのもいい方ほうだと思います。また、きせつやキャラクターのシールをはれば、子どもに人気がでるし、買いたい人がふえるからです。

魚は高くて売れないそうですが、いろいろな方ほうをつかって少しでも魚ずきがふえて魚を買う人がふえたらいいなと思います。

そして、お母さんが魚をさばけるようになってほしいです。そこで、京と市中おう市場の食ざいをつかった「魚のさばきかた教室」にかよって、魚をかんぺきにさばけるようになってほしいです。

大すきなひょうごのうみ

明石市立高丘西小学校 一年
境 香陽

わたしは、ひょうごけんあかししにすんでいます。三月に、ほいくしょをそつえんして一ねん生になりました。

はる、わたしがほいくしょをそつえんするころ、おとうさんがきんじょのスーパーで、いかなごをかってきて、くぎにをつくってくれました。つくっているときから、いいにおいでした。おにぎりに入っていたり、おべんとうに入っていたりして、とてもおいしかったです。

なつ、おとうさんと、あかしかいきょう大はしのちかくに、つりにいきました。アジやサバをいっ

ぱいつりました。小さいサバはあまりおいしくないからにがしました。その日のよる、おとうさんがアジを天ぷらにしてくれました。とってもおいしかったけど、ほねが気になったので、一こだけにしました。

あき、大くらかいがんで、おとうさんとつりをしました。なかなかつれなくて、となりでつりをしていたおじいさんが、アジをつるのを手つだってくれました。となりのとなりでつりをしていたおじさんは、つれたハマチをくれました。その日のよる、おとうさんがアジの天ぷらと、ハマチのてりやきをつくってくれました。アジは、やっぱりほねがきになって、一こたべました。てりやきは、おいしくて、四つくらいたべました。

ふゆ、きのさきにいきました。みんしゅくにとまって、やきガニやカニグラタンをたべました。カニは、もともとあんまりすきじゃなかったけど、この日のカニはおいしかったです。

いま、このさく文をかいているときも、おとうさんがキッチンで、きょうふねでつってきたブリやハマチをさばいています。しゃぶしゃぶやおさしみにして、たべるのがたのしみです。

わたしは、はるなつあきふゆ……のそれぞれのきせつで、おいしいさかながとれるので、ひょうごけんのうみが大すきです。これからもずっと、大すきなうみで、つりやあそびをしたいです。

鯛との戦い　〜漁業関係者の努力〜

明石市立花園小学校　四年
中村　幸太朗

はじめに

みなさんは、明石鯛をごぞんじだろうか。明石鯛は明石かいきょうの急流で育った、身の引きしまった鯛だ。すこし体が小さいが、身が引きしまっておいしいとひょうばんになり、ブランド化された。昔は高級品だったが、今は家庭の食たくにも出てくるようになってきた。そんな明石鯛がどのような人の手間と苦労がかかっているのかを見ていくが、と中鯛よりもおもしろいものに目がいってしまい、話がそれてしまう。温かい目で読んでほしい。ただし、鯛よりもおもしろいものというのは、文の中のおたのしみだ。

第1章　勝負その相手は鯛

漁をおこなう期間は4～12月。夜明けから漁をおこない夏期は4時ごろ、冬期は6時半ごろに出港する。季節は夏。朝4時に漁港を出発した時からもう鯛との勝負は始まっている。まずは漁場に行く。その漁場は初めて網を投下する漁場かもしれないし、前に投下したことのある漁場かもしれない。いよいよ網を投下する。投下する時は、よし、獲るぞ！やワクワク、良い所に網は落ちているかな？といった期待感があるそうだ。とても驚いた。なぜかというと、漁師はきんちょうしていると思ったからだ。投下する順番はまず、大きいうきのような物を付けたロープを落としていく。そして小さなうきがついた網を船の後ろから落としていく。網目1つ分のはばは約8センチメートルで、網の色は海の色ににせて緑色だ。糸の細さは、約1・3ミリメートルという細さでひじょうに細い。細すぎる。約40メートルある網で魚のむれをとりかこむ。ちなみに、網の長さは何尋と数えるそうだ。初耳だ。ロープのはしに着いたら、船を後ろにいどうさせながら網を船に引き寄せていく。引き寄せた後は、船上から網につながるロープをローラーを使って引き上げる。そして、なんと網は人力で引き上げるそうだ。とても大変そうだ。さらに、魚を傷つけないように一匹ずつ外していく。小さいものは網に引っかかっているので、からまった網から外していく。

さあ今度は港に帰ってきてからの事だ。魚を傷つけないように、弱らないように気を付けて小さいものだと数匹、特大だと一匹ずつたも網ですくって歩いてではなく、なんと生けすまで走って鯛を運ぶそうだ。網を船上に持ち上げる事でさえ大変なのに、生けすまで走って鯛を運ぶとは。そんなに体力があることに、おどろいてしまう。

第2章　せりは一瞬、ドキドキは一生！

さあ、まもなくせりが始まる。せりは二つの種類がある。一つ目は明石うら漁業協同組合のせりで、そのまま魚屋にうる。二つ目は公設地方おろしうり市場のせりで仲おろし業者が魚を買い、その魚を飲食店やすし屋、魚屋が買う。今回は、どちらもしょうかいする。

まずは、明石うら漁業協同組合のせりで魚屋がちょくせつ買うときのことをしょうかいする。海側にせり人、魚が流れてくるところをはさんで反対側におおぜいの魚屋がかいだんのような台の上に三だんに分かれて立っている。まるでオペラのげきじょうのように、せり人と出てきた魚が主役で、それを見ているお客さんが魚屋のようだ。せり人はベルがなるのを待つ。「カランカラン！！」ベルがなった瞬間、わけのわからない言葉をものすごいいきおいで言う。さあ、しんけん勝負の始まりだ。その速いこと速いこと。言葉も速いしさらには魚がでてくるスピードも速い。この瞬間ぼくはしょうげきを受けた。「これはすごい。これはおもしろい。」と。せりは一瞬だ。でもしょうげき、わくわくの気持ちは一生だ。その後もわくわくは止まらない。もちろん、ぎもんもいっぱい出てくる。「なにを言っていたのだろう。」「どれぐらいでおぼえたのだろう。」まず体側が指6本分ぐらいのサワラが入ってきた。僕はその時なんとなく煮付けにしたらおいしそうだと思った。僕はぼうぜんと、出てくるサワラを見ていた。そして5秒もたたないうちにまた次のサワラが出てくる。この速さがすごい。さらにそのサワラを5秒の間にしんせんかを見分けている魚屋もすごい。どこがすごいかというと、せんどを見分け、ねだんを素早く考え、指でせり人に伝えるという動作を目にもとまらぬ速さで行うのだ。

その後、さっきせりをしていたせり人一年生のいとうさんにインタビューをした。まずはどれく

らいの期間でことばを覚えたのかを聞いてみた。すると、半年かかったと答えてくれた。いとうさんは、覚える気がなかったからだそうだ。次に「大きな声を出すためにどんなことをしていますか。」と聞いてみた。そしたらこう答えてくれた。「ふっきんはいきんを100回ずつしています。」と。ぼくはあまりの量に目を丸くした。さらにこんなしつもんもしてみた。「鯛特有の言葉などはありますか。」そしたら「鯛特有の言葉はないけど、色々じょうほうは入っています。例えば、つりでつったからきれいだよ、とかこれは色がきれいだよ、とかそういう事を言っています。」と答えてくれた。鯛特有の言葉がないことに少しおどろいた。インタビューが終わった後タコをさわった。タコはとてもぬるぬるしていてきゅうばんをさわったら自分からひっついてきたからどきっとした。タコが陸を歩いているのを初めてみた。タコは、重さでねだんがつくのだそうだ。

次に、魚屋にインタビューをした。「魚のせんどはどのような所で見分けていますか。」と聞いた。すると「まずはやっぱりふとっているかやせているかですね。あとせんどがおちていると色がうすくなっていきます。鯛は特にわかりやすくせんどがおちると頭の方から色がピンク色になります。」と教えてくれた。これは買い物で魚を買う時に役に立つな、と思った。

第3章　市場の中は一発勝負であふれている

次は、仲おろし業者がせりで買った魚を飲食店やすし屋、魚屋が買いにくる、というやりかたをしょうかいする。午前4時30分に「ブー」というブザーがなると同時にいせいのよい声があちらこちらで上がる。公設地方おろしうり市場は明石うら漁業協同組合とはちがう所がいくつかある。一つ目はせりをふくすうの場所で同時に行っていることだ。明石うら漁協では1か所で行うが、公設地方おろしうり市場ではふくすうの場所に分けて行っている。二つ目は全国からいろいろな魚が集まる所だ。明石うら漁協では明石沖でとれた魚のみがせりにかけられるが、公設地方おろしうり市場では日本全国から魚が集まる。本州は一日でとう着できるが、北海道や九州は二日かかるそうだ。ここのせりは仲おろし業者さんたちのふんいきが変わりやすい。しんけんになったり、まんざいのように楽しそうになったりしている時もある。せりの仕方は、ならんでいる魚をせり人がせりにかけると、仲おろし業者がミニ黒板にねだんを書いてチラッと見せる。その見せるスピードと、その黒板に書いてあるねだんを見分ける事が出来るせり人がすごい。まさに、仲おろし業者とせり人の目にも止まらぬ一発勝負の早業だ。そして一番ねだんの高い仲おろし業者の店に行く。同じねだんだった場合は、落札札をくったりじゃんけんをしたりして勝った方の店に行く。昼市の場合は、順番にならんで先に高いねだんを出した方の店にわたされる。

せりが終わり、今度は仲おろし業者さんたちの店を回っていった。その中には、鮮魚をあつかう店だけではなく、焼穴子や塩干物をあつかっている店もあった。

市場を見学した後は、自由行動をするようになった。ぼくは一番気になっていた生けすを見に行った。なぜならば、魚のしめ方や生けすの中の魚の様子にとても興味がわいたからだ。すると、魚をしめる人が生けすの中を見せてくれた。生けすの中の魚は鯛やブリが入っていて、仕切りで分けられたカゴに入れられていた。こうすると、いつ市場に魚が届いたか、どこ産の魚なのかが分かるんだそう。しかし、ブリはカゴに入っておらず、生けすの中でせまそうに泳いでいた。そして、僕はこの後とてもしょうげきを受けることになった。

いよいよ注文が入って、鯛をしめる所を見れることになった。一番楽しみにしていたのでわくわ

くしながら生けすの所に行くと、鯛がカゴから出される所だった。そしてついに始まった。そのしめ方の速いこと速いこと。目にも止まらぬ速さで終わった。二秒もかからない早業だった。さすが。プロの一発勝負だ。僕はしめ方を聞いた。「まず目の上らへんにある鯛の急所、人間で言えば、のうみその所をつきます。そしたらきぜつしたような状態になるので、次に、あばれられないようにえらの所から包丁でせぼねを切ります。これでしめることができました。最後にせん度を保つために、せぼねの上に通っている神けいをしっぽの方からはり金のようなぼうでつきます。」と教えてくれた。ちなみに鼻のあなから神けいをつく地方もあれば、さっきのようにしっぽからつく地方もある。昔は、ぼうを鼻の穴から入れろ！と厳しく言われていた。魚屋が多く、店内で魚を丸ごと売っていたので、きずが付くと商品にならなかったからとても外見にきびしかったらしい。でも、今はスーパーなどがふえ、切り身で売られる事が多いことから、外見にはそれほど厳しくないそうだ。さらに、魚には表うらがあり、頭を左にした時に見える面が表だそうだ。今までそんなことを聞いたことがなかったのでおどろいた。

市場を見学する前にいたたてものに帰ってくると、さっきの焼穴子屋さんからいただいた、焼穴子があった。それをお父さんといっしょに食べた。その焼穴子、味がしみていてふわふわだった。さらにほねも全く感じない。とてもおいしくて一瞬で平らげてしまった。焼穴子一尾で、白ご飯3杯は食べれそうなほど美味であった！！！

その後、仲おろし業者さんにインタビューをした。一つ目は、「せり人はなにを言っているのですか。」これは以前、明石浦漁協のせり人のいとうさんにも聞いたが、場所によってせり人の言葉がちがうと考えたからだ。実はリズムをとっているだけだそうだ。しかし、せり人によってしゃべる言葉がちがうのだとか。とても意外だった。なぜならば、場所によって言葉がちがうのかと思っていたが、ほとんど同じだったからだ。でも、やっぱりせり人によって言葉はちがうのだな。次の質問は、「その中にどんなじょうほうが入っているのですか。」すると、「例えば魚のきかくですね。この中にどんな魚がどれくらい入ってるとかですね。」と答えてくれた。ここは、明石うら漁協と同じだなと思った。さらに、「箱に札が入っているけどあれはなんなんですか。」と聞いた。それは、漁師の名前が書いてある札、仲おろし業者の番号が書いてある伝票、落札札が入っているのだそうだ。するとえびす本組合長が「6入3・5はかいけつしたんか？」と聞いてくださった。というのは、市場を散さく中の事だった。「あれ、これなんだろう。」それは、発砲スチロールの箱の中に鯛と一緒に入っている札に書かれていたことだ。この時、なんなのだろう、気になるな、と思っていた。3・5kgと書いていたのは、箱の中の魚の重さが主流は3kgだけど、中に入っている魚の量が3・5kgだから書いてあるのだそうだ。これが書いてあることによって、魚の量の違いが分かるのだそうだ。そしてその鯛を買ったのが十四番の仲おろし業者さんだからと教えてくれた。

他にも、明石鯛とほかの鯛のちがうところがわかった。ちがうところと言えば、たとえば長崎の鯛はえさが少ないから見つけるために目がでっぱっているそうだ。とても実物をみたくなった。さらに、頭がカクッとなっている鯛もいるそうだ。テレビで長崎の鯛を見たことがあるが、本当にカクッとなっていた。ちょっとおもしろいな。明石鯛は体格が、スマートで、目の上がエメラルドグリーンやマリンブルーなど、とてもきれいな色だ。さらにはキラキラとかがやいていた。とてもきれいだ。とても自然が生み出した色とは思えないほどのきれいさだった。ちなみにここの事は、アイシャドウなどとよばれているそうだ。明石鯛は他の鯛とはちょっとちがうとくちょうがあるんだなと思った。

参考としたテレビ番組
NHK Eテレ

ギョギョッとサカナ☆スター「マダイ」

私の大好きな海

神戸市立義務教育学校港島学園小学部 三年
谷吉 英恵

私は今年、兵庫運河真珠貝プロジェクトに参加しました。プロジェクトの1回目は、あこや貝に核とパーツを入れました。その後はそうじを当番制で2回しました。私の1回目のそうじの日は前の週が台風でそうじがなかったので、すごくどぶ臭いし、汚れが目立ったし、かきとふじつぼなどがたくさん付いていました。服も軍手もどろどろになりました。ほや貝はひもに付いて育っていたので、さわってみると、思ったよりかたくて、水に出して押すとてっぽうみたいに水がぴゅーっと出て面白かったです。2回目のそうじの時は貝はきれいで、そうじの時間もかからないし、楽でした。1週間そうじしないだけでこんなに変わるのだと初めて知りました。夏休みは兵庫運河の水を顕微鏡で見たり、塩分のうどをはかったり、あこや貝でかざりを作ったり、貝をペーパーで削ってみたりと色々な経験をさせてもらいました。そうじの前に、兵庫運河にエイが大量発生しているとニュースでみました。それであこや貝も食べられないかと心配になったので、真珠貝プロジェクトの人に聞いてみると、多分、あこや貝はネットにも入っているし、アサリみたいな貝しか食べないので、大丈夫だと思いますと答えてくれたので、少し安心しました。急にエイがなんで兵庫運河にやってきたのかな？ と不思議に思ったので、ニュースなどをよく見てみると、エサを求めているというのと、気温がちょうどよいみたいで来ているようでした。ニュースを見ているとあさりの養殖所の人が色々な種類の魚は増えてきているのはうれしいけど、エイにあさりを食べ散らかされているのはうんざりと言っているのが忘れられません。私は5才の時におきなわへ旅行へ行って、ホテルで飼われてるエイにえさをあげたことがあるので、エイはかわいいなと思っていました。ですが、あさりの養殖所の人の話を聞いて、エイはこまった生き物だと思いました。お母さんもエイにきょうみを持ち始めたので色々としらべました。須磨水族園のお姉さんに聞いてみると、エイの歯はどんどん新しくなると言っていました。ということは虫歯になっても生え変わるということなので、便利だなと思いました。お母さんは歯医者通いでうんざりしていると言っているとこなので、うらやましいと言っていました。須磨水族園のエイのすいそうの底にはエイの歯が落ちているそうです。私の歯もどんどん新しくなってくれたら歯を磨かなくてすむので、外でチョコレートを食べてそのままいてもいいし、夜もすぐに寝れるし、時間短縮になるからいいなと思いました。
あと、エイが増えているというので、釣ったら良いんじゃない？ と思いましたが、毒を持っている

そうなので、釣ってる場合じゃないと思いました。襲ってはこないそうですが、間違って踏んでしまったりすると毒をいれられるので、気をつけないといけないと思いました。海のことを調べると、今は栄養不足だそうです。魚のエサになるプランクトンが少なくて、放流しても魚が育たないそうです。どうしたら私の大好きな魚やノリが育ってたくさん食べれる海になるのか？ということも調べました。海底こううんやかいぼりをしたら良いそうです。海と山は別のものと思っていましたが、両方つながっているもので、山からの栄養が海の栄養になっていると知りました。また２０５０年にはこのままいくと海の魚よりゴミの方が多くなってしまうそうです。私ができることと言えば、ごみひろい！時々家族でごみ拾いをしているのですが、時々ではなくしょっちゅうゴミを拾わなければいけないなと思いました。これからもいっぱい海のお魚を食べたいです。また今度、真珠のとりわけです。どう育ったか、楽しみです。

〈中学生の部〉

アカウミガメの故郷、明石

滝川中学校 二年
岸田 航

瀬戸内で、唯一アカウミガメの産卵が見られた明石には、ウミガメサンクチュアリーがあります。産卵しに来るアカウミガメの保護のため、夕方から海岸でジェットスキーや花火を禁止しているそうです。

平成二十六年には、望海浜でアカウミガメの産卵がみられたそうです。

令和四年にも、何度かアカウミガメが保護されたニュースを目にしましたが、その後、明石・瀬戸内での産卵は見られていません。

ぼくが生まれる前に他界した曾祖母は、明石の林崎海岸の近くの出身ですが、ぼくの母から、「おばあちゃんが小さいとき、浜でウミガメを見たことがあったと話していたよ。」と聞いたことがありました。昔は、砂浜にウミガメがいることも珍しくなかったのかもしれません。

ウミガメと共存できる環境、ウミガメが産卵に訪れる環境には、どんな条件が必要で、明石にウミガメの産卵を呼び戻すことができるのでしょうか。

ぼくが見たアカウミガメの産卵を参考に考えてみたいと思います。

ぼくは、小学校三年生の時、家族旅行で徳島県にウミガメの産卵の見学と、ウミガメの甲羅洗いのボランティアにいきました。

そこは、徳島県の美波町というところです。ウミガメの産卵場所として有名で、町内には、ウミガメの博物館がありました。

宿泊した旅館は、海岸に面して建てられ、ウミガメの産卵シーズンには、夜、車の通行も禁止されていました。車のヘッドライトがウミガメの上陸に悪い影響を与えるらしいのです。

深夜、母が登録したウミガメールというメールサービスから、海岸にウミガメが上陸したというメールが届きました。宿泊した旅館を一歩出るとそこは、真っ暗な世界でした。頼りない懐中電灯の明かりを頼りに、ウミガメ産卵場所へと移動しました。波の音のほか、何の音もしません。父も母も弟も、静かに静かに暗闇を進んでいきました。

とても暗い懐中電灯を持ったおじいさんが、一人ウミガメの産卵を見守っていました。毎晩、交代で海岸を監視しているそうです。

そこには、体長一メートルを超える大きなアカウミガメがいて、後ろひれで、砂をかいて穴を掘っていました。

おじいさんの話では、ちょうどいい場所がみつかるまでもう数回、近くを掘っては場所を変え、いまのところで、やっと掘り進めることにしたんだそうです。

やわらかい砂は、かいては崩れ、かいては崩れを繰り返しながら、長い時間をかけて、五十センチくらいの深さまで掘り進んでいきました。

ウミガメの甲羅はすっかり砂まみれでした。

そして、ぽとぽととたくさんの卵を産み落としていきました。

卵を産む時間はさほど長くはなかったですが、前にテレビで見たように、ウミガメは涙を溜めていたように記憶しています。

その後、器用に後ろヒレで砂をかぶせ終わったころには、あたりは明るくなってきていました。

ウミガメは、あたりを数回、円を描くように回ったのち、少し桃色っぽい明け方の空が広がる海に向かい振り向くことなく消えていきました。

その時のウミガメの後ろ姿をぼくは今も忘れていません。そして、波がウミガメをさらって、姿が見えなくなりました。

ぼくは弟と二人で、しばらく立ち尽くし、その神秘的な姿を見送ったのを覚えています。

ぼくたちが見たウミガメは、これまでに何度かこの海岸にやってきたことのある個体だと、おじいさんは教えてくれました。

初めて見た野生のウミガメは、水族館で見たものより大きく、甲羅にはいくつもの寄生虫などが付着していて、なにより、力強かったのを覚えています。

この経験をしてから、それまで魚にしか興味がなかったのに、ウミガメのことにも関心を持つようになりました。

ウミガメの産卵を呼び戻すうえで、まず、明石で産卵があったことの知名度が低いことが挙げられます。

知名度を上げて関心を持つ人を一人でも多くすることが必要です。

学校の友達に、ウミガメの産卵が明石であったことを話しても誰一人として知っている人はいませんでした。明石の産卵場所近郊の中学生なら知っているかもしれませんが、すぐ隣の神戸市では、それ程知られていないのです。ウミガメのことについて知らないと環境の保護を訴えても、人々の協力は得られません。環境は、そこに住む人だけの力で整えるものではありません。レジャーで訪れる人、近隣を通行する人、上流の河川を利用する人など、幅広い人たちの協力が必要となります。

アカウミガメの餌となる貝や小魚など、大阪湾から明石海峡にわたる海の環境にも視野を広げて考えるべきだと思います。

次に、産卵場所の明るさ制限です。

徳島の海岸で実践されているように、夜間の厳しい照明の制限が必要です。

ウミガメは明るさにとても敏感です。夜の海は月明かりが反射し海のほうが陸より明るくなります。ウミガメは、産卵地である砂浜を、暗いほうが陸であると判断して上陸するそうです。徳島で、ウミガメ監視員の方がそう教えてくれました。また、産卵後、海に戻るのも、明るいほうを目指し

て進むので、車のヘッドライトなどの明かりが砂浜沿いの道路についていると誤って道路へ向かうことがあるそうです。それだけでなく、孵化したばかりの子ガメも海と陸を間違えてライトへ向かって行き不運な死を迎えることもあるそうです。

ウミガメの産卵時期には、人の通行はもちろん、近隣の道路も通行制限をし、建物も明かりが漏れないように細心の注意を図るべきです。

最後は、地球温暖化の問題です。近年、注目され、個人レベルでも取り組みが行われていますが、ウミガメも温暖化に奔走させられています。昨年には、沖縄県の久米島でアオウミガメが大量に網にかかり殺害された事件や、温暖化による対馬海流の影響で十月になってまで、北海道でアカウミガメが網にかかって死んでしまったなど悲しいニュースを耳にしました。

温暖化により、これまでの産卵地の海水温や砂浜の温度が上昇し、産卵に適さなくなってしまうということも考えられます。アカウミガメは回遊する際、決まったルートを通ることが多く産卵地も固定ではないものの同じ場所を好むといわれています。温暖化でウミガメが好きなルートで回遊できなくなり、明石に来てくれなくなることを何としてでも避けなければなりません。

これらのどれが欠けてもウミガメが明石に戻ることは難しいでしょう。

まずは目の前の海のことを知り、興味を持ち続け、曾祖母の時代のように「明石にはウミガメが産卵に来るんだよ」と、ぼくの子供や孫たちが語る未来を迎えられるように、今、ぼくにできることを考え、行動していきたいと思います。

海学で手に入れたもの

成城学園中学校　一年
峯岸　泰希

海学の始まりは、6月であった。

大学側と連携して、大学の温水プールで海学に備えて泳ぎの練習をする。

6月。寒いながら入る温水プール。表示してある水温は本当の水温なのかと疑うくらいの寒さである。

事前に泳力アンケートを取り、A班からD班まで振り分けをされる。

僕はと言うと、最後に泳いだのがおよそ5年前。勿論泳ぎは、ほぼできないと回答した。

1回目の温水プールの授業でアンケートをもとに泳力チェックをした。

やはり僕は泳げなかった。
だから、D班で基礎から学ぶことになった。
D班というのは、そもそも泳いだことがない人からクロールは泳げるという人まで様々な人が振り分けられている。
なので、泳力も班の中で変動してくるのだ。
僕はその中で、真ん中のちょっと泳げる方だった。
そこから、平泳ぎを体育の時間に合計2ケ月間学んでいった。
足の形・イメージ・浮く力など沢山の練習をした。
昇級していった友達も降格していった友達もたくさんいたが、僕は変動しなかった。
最後の屋内プールの練習では、ほぼ全員が25メートルは平泳ぎを泳げていた。
7月。外プールが解禁された。この外プールは、小学校と同じ場所を利用していく。
水温はというと、やはり寒かった。しかし、日が経つにつれ温かくなっていった。
また、新しいメンバーも加わった。高校のライフセービング部だ。
ライフセービング部に協力してもらいながら、当日まで泳ぎを練習する。
外プールで練習し始めるということは、基本的には泳ぎだけの授業をやっていくということだ。
基礎的な練習は終了し、泳げる距離を伸ばしてゆく。それが、目標だ。
外練習は、すごく早く感じられた。1ケ月だけだったので物理的にも短いが、僕らにとっては2週間くらいにしか思えなかった。
だが現実の世界を見ると、練習回数は10回を超えていた。

全ての練習が終わった後、記録会というイベントがある。
これは、A班は2キロ、B班は1キロの遠泳。C班は500メートル、D班は250メートルをプールで泳ぐイベントだ。
僕は外練習の期間で、急成長した。
平泳ぎをずっと泳ぎ続けることができ、C班に昇級することも可能だった。実際、そのような話を先生から頂いたのだ。
でも、D班に残ってみんなと泳ぎたいと思った。しかもC班の場合、海の学校中はずっとD班と合同なので、D班と実施内容があまり変わらないのだ。
D班に残ってみんなと泳ぎたいと思ったのには理由がある。それは、みんなが泳げるようになってから泳げない子というのが出てきたということに関係してくる。
そのような現象が起きるのは、仕方がないことだ。人間には、向き不向きがあるから。
でも、その子達が必死に頑張っているのを見ると、応援したくなるし励まされる。
勿論、その子によって時間が延びてしまうことも多々あった。
それでも、間近で応援することのできるD班に僕は残っていたかったのだ。
どんなに遅れても、どんなに辛くても、どんなに苦しくても。頑張ってゴールを目指す。かっこいいと思う。
そんな中迎えた、7月14日。僕の誕生日だった。記録会のこの日は、あいにくの雨だった。
大量の雨が降っていたこの日、記録会は決行された。AB班の待ち時間、テントに雨は溜まるし、寒くて震えるし。大変だった。

普通だったら中止すべき天候だ。
手が悴んできた頃、出番がやってきた。
テントの中でする準備体操。プールサイドは滑るから、慎重に行動しなければならない。一歩踏み外したら、大惨事である。
止みそうにない雨がまだ降っている。そんな中、スタートの笛が鳴った。
僕は、1番最初なのでトップバッターということになる。一番速く進み、一番後ろとの間隔を調整する役割だ。
往復5周。これが僕たちの試練だった。
3周目に入る頃だっただろうか。奇跡は起きた。
一気に晴れたのだ。
あの止みそうにない雨が止んだ。
情景描写というのは、本当に起こるものなのだと実感した。
後ろにいる皆も僕と同じように頑張っているのを感じながら、僕は前に進んで行った。
記録会はあっという間に終わってしまった。
1番最初にプールサイドに上がったので、D班が泳いでいるのを見ると、みんなも水面も同じくらい光り輝いていた。
C班もその後直ぐに終わり、記録会は終了した。
残りは、海の学校のみだ。千葉県富浦で行われる海学は、新型コロナの影響で2年間中止になっていた。

だから今回の海学は、体育科・ライフセービング部も凄く楽しみにしていて気合が入っている。
2週間後。海学がスタートした。学校からバスで約2時間。前後半に分かれ、前半チームの僕らは4クラス体制で富浦に向かう。
富浦に着いた。その日の午後には海に入る。
ホテルに着いてすぐご飯を食べて、自分達の宿泊部屋で着替えをした。
着替えをしたら、体温を保つためのテーピングを耳にした。
それから、ロビー集合の時間まで部屋に待機する。
集合時間になったら、ビーチサンダルを履き、アクアシューズと着替えを持ってロビーに集合する。
海ではアクアシューズを履くのだ。
バスで移動すること15分。富浦の原岡海岸に着く。初日はここで、3日間の流れの説明を受けたり、水遊びなどをしたりした。
また、体操代わりに、先生独自のダンスを踊る。謎めいた踊りを踊ってから、急に明日からの3日間が不安が押し寄せてきた。
1日目の海のカリキュラムは、砂遊びをするだけだった。記念写真も撮った。それから着替えをして、宿に戻る。その後、講習会というのを受けた。これは、夕食後に実施されるライフセービングに関するカリキュラムだ。具体的には、波が強いところや海の危険性。もしものことがあった時どうすれば良いのかについてを学んだ。それが一日目の講習会だった。眠れないかと思ったが、意外とぐっすり眠りにつけた。
二日目。天候は良好。朝食の時に確認事項の伝達などを受けて、午前から原岡海岸だった。身支度

を早めに済ませてしまい、ロビーに集合。海岸に着くと、ダンスが始まった。ダンスが終わると、レスキューボードを利用した実習になった。
バランスの取り方が難しく、漕がなければならないレスキューボードは、ライフセービング部のプロ達はちゃんと使えていた。
さすがだ。
レスキューボードで遊んだら、午後の遠泳や隊列泳の練習した。午前のウォーミングアップなので、みんなで隊列泳をしたくらいだ。
午前はこれでおしまい。着替えて、一旦宿泊施設に戻った。昼食を食べて、また海岸に戻る。明日も明後日も。
少し不安は軽減されてきたが、やはりまだ不安はある。
迎えた午後、CD班の僕らは隊列泳をした。隊列泳とは、40分間止まらずにひたすら泳ぐということだ。
止まってしまうと単純に、クラゲに刺される恐れがある。実際、クラゲに刺された子もいた。
勿論僕は、ずっと泳いでいたのでクラゲに刺されなかった。しかし、クラゲのカサの部分には何度も触ってしまった。
隊列泳が終わって記念撮影をした。
その後まもなく、A班とB班が戻ってきた。A班とB班は、遠泳で2キロ泳いでいたのだ。
こうして、二日目の海でのカリキュラムが終了した。
二日目の講習会は、心臓マッサージについてだ。

以前から救命学を学んでいた僕からすると、話される内容はほぼ知っていた。
だが実践すると、なかなか100%にならない。落ち度は分かっている。しかし、中々100%というのは難しいものだ。
難しいものだ。心マがこんなに難しいものだとは思ってもいなかった。
そんなこんなで、二日目は終わった。半分が終わってしまったのだ。
三日目。この日はお楽しみ会があるので、海での練習は午前だけだった。
海岸でダンスをする時に、前に出て踊らないかと誘われたので、前に出て踊った。
不安どころか、結構楽しかった。
そんな海学も明日でおしまいだ。そんなことを考えるより、今を楽しもうと思った。
ダンスが終わると、ライフジャケットの講習をした。
ライフジャケットを着用して、遊泳禁止区域に落水して泳いだ浜に戻るという練習だ。
恐らく、ライフセーバーがたくさんいることから遊泳禁止区域での練習が許可されたのだろう。
落水体験は、僕がクラスのトップバッターだった。
怖かったけど、意外と楽しかった。冷たい海を感じながら、僕らは浜へ戻った。
こうして、三日目の海でのカリキュラムは終わりだ。午後は、クラスの時間とお楽しみ会の練習だ。
迎えた午後、悪天候だった。だからクラスの時間は、室内で過ごすしか無かったのだ。
様々なレクをした。誰かを褒めるゲーム等1時間30分くらい楽しんだ。そこで、僕が少し褒められた。
それで調子に乗ったのが後々痛手となるのだった。
早めにお楽しみ会の練習が始まった。僕らのクラスの男子は「桃太郎」をやることになっていた。

当初僕は、お婆さん役だった。しかし、桃太郎役が自ら僕を指名して配役変更になった。
桃太郎の役柄を面白くするために、桃太郎を厳つくする設定だった。
しかしそれが過度すぎて、リハーサルの時に女子達は笑いながらドン引き。
煽る動きや声の低さなどが凄かったらしい。
どうしようか男子達で検討した末、このまま演出を変えずにやることにした。
そして迎えた本番。声の低さの時に小さい「キャー」。ここまではまだマシだった。煽る動きをした瞬間、ドン引きしすぎてとあるクラスの女子全員が立ち上がって「キャー」と大声で言った。
心の中で「多分、二学期廊下歩けないな」と思った。でも、楽しかった。
それでお楽しみ会は幕を閉じた。
最終日。朝の体操は、雨がぱらついていたので中で実施。
朝のスピーチは、僕がやった。
スピーチでは、「最後の日なので、色々な人に感謝をしましょう」ということを話した。
いつも通りバスに乗り、海岸に到着。最後のダンスも前で踊った。ダンスを踊った後の振り返りも僕がやった。
内容としては、「この踊りを始めて踊った時より、みんなが輝いていた」という話をした。
予定通りに午前は、泳いだ。泳いだというより、自由時間を過ごしたという表現の方が良いだろうか。
砂場で遊んだり、水遊びをしたり。
「ここにもっといたい」という声も、たくさんあったようだ。僕もそう思っていた。
昼食を食べて、富浦を出た。4日間の感謝はちゃんとしてきた。

16時頃に学校に戻ってきた。お楽しみ会の話などしながら帰宅。
楽しい日々だった。
海学では、泳ぐということだけでなく、美しさというものも学んだ。
みんなが輝く姿を見れた海学に感謝しかない。
ちなみに僕はというと、2学期最初の1週間は視線を感じていた。
お楽しみ会が結構効いていたのだろう。
でも、それをきっかけに他クラスに新しい友達もできた。
結果オーライというところだろうか（笑）
僕の印象がガラッと変わったのだろう。
6月の練習から海学は始まっていた。6月から8月までの3ケ月間。長かったようで短かった3ケ月間。楽しかった3ケ月間。大切なものを見つけた3ケ月間。キリがないので、このくらいにしておこう。何がともあれ、この3ケ月は僕にとって有意義な時間となった。
そんなこんなで、僕らの海学は幕を閉じた。

出会いに感謝を。

ゆい

海。この言葉を聞いたり、海のそばを通ったりすると、私の中で幼い頃のある大切な記憶がよみがえってくる。ただ、最近は私自身も忙しくて忘れていたのだが、この「こども海の文学賞」で作文を書くにあたって、また思い出すことが出来た。

私は、小学四年生くらいの頃に一度、浜辺で出会った人から本を貰ったことがある。その日のことは幼かった私にとってすべてが衝撃的で、今でも鮮明に私の記憶に残っている。

少し肌寒い、秋晴れの日だったと思う。私はその日友達と、海の近くの公園で遊んでいた。しかし、遊びに飽きたのか、私達はなぜか「海を見に行こう」という話になった。当時の、小学生の私達にとって「海に行く」という行動は、とてもロマンの溢れるものであっただろうから、このような奇怪な行動にもしかたがないと思って見逃してほしい。

しかし、私達の目の前に広がっていたのは、いつも学校や家から見ていた、あのキラキラしたきれいな海ではなく、ゴミに埋もれた汚い海岸だったのだ。想像とかけ離れた景色を、初めて目の当たりにした私は、そのとき大きな衝撃を受けた。それは、きっと私の隣に並んで見ていた友達も同じように感じていたんだと思う。だから、私たちは一度家に帰ってゴミ袋を取ってき、またその海岸で集合した。

そうして、私と友達、小学生二人での、初めてのゴミ拾いが始まったのだ。驚きの連続だった。大量のペットボトルはもちろん、家電製品や自転車、大きいものから小さいものまで大量のゴミが流れ着いていた。そしてすぐに、私達の持ってきたゴミ袋はいっぱいになった。当時、私達は「海岸の全てのゴミを集めてやる」という浅はかな考えを持っていたのだが、そのとき、それがあまりにも無謀であることを知った。ただ、諦めはしなかった。友達と相談し、「今日はできる限りのゴミを集めよう」という話になった。

しかし、私達は新しいゴミ袋を持っていなかったので、悩んだ末、私は遠くで私たちと同じようにゴミ拾いをしていたおじさんに、声をかけた。「ゴミ袋、余ってませんか？」そう言うと、おじさんは初めすごく驚いた顔をして、それから「やっぱりゴミ拾いしててくれてんね。ほんまにありがとう。」と目に涙を浮かべながら、私達に感謝を伝えてくれた。そこまで感謝されると思っていなかったので、少し照れくさかったのを今でも覚えている。

ただ、おじさんは余りのゴミ袋を持っていなかったので、「この袋に入れてくれたらいいよ」と

いうおじさんのご好意に甘えて、三人でゴミ拾いをすることになった。お互いに軽く自己紹介し、そのとき、おじさんが西谷さんという名前であることを知った。

そして、私と、友達と、西谷さんの三人でのゴミ拾いが始まった。ゴミ拾いをしながら、私達は西谷さんとたくさんのことを話した。毎週毎週、海岸のゴミが増えていくこと。中国や韓国など、色んな国からゴミは流れ着いているということ。他にも、たくさんのことを教えてもらった。当時の私にとって全てが衝撃的であった。

夕焼けのオレンジ色の光が眩しくなってきた頃、ようやくゴミ袋がいっぱいになり、ゴミ拾いは終了した。西谷さんはいつも、集めたゴミをまとめて捨てに行くらしく、帰り際、私達はゴミをまとめて置いている場所に案内してもらった。そこには、以前に西谷さんが集めたとされる、かなりの数のぱんぱんのゴミ袋が置いてあった。今まで、これだけの量のゴミを一人で集めていたのかと、幼ながらに私は、西谷さんの信念に心を動かされた。そうして、その日は解散した。これらの出来事は、私にとってものすごく色濃い出来事で、情熱、信念というものを、初めて間近で感じた瞬間であった。

しばらくたったある日、私は外を歩いていると、近所の知り合いのおばさんから「ゴミ拾いしたんだってね。偉いね～。」と声をかけられた。少し恥ずかしかったが、とても嬉しかったのを覚えている。私はそのとき、その言葉とともに、おばさんからある大きな茶色の封筒を受け取った。開けてみると、中には一冊の本が入っていた。「西谷さんからだよ」おばさんにそういわれた。

友達の分と合わせて二つの封筒を受け取り、家に帰って、中に入っていた本を読んでみた。題名は「海と空の約束。」まるで西谷さんのような、優しくて温かいお話であった。

西谷さんは本名、西谷寛さんという。この作文を書くにあたって初めて知ったのだが、「海と空の約束プロジェクト」の代表で、長年自然環境と向き合い、環境保全活動に従事してきたすごい方であった。こんな方と出会えて、色んなことを教えてもらえて、本当にすごい経験をさせてもらえたな、と感じた。

海。私は海と聞くと、淡路島と明石海峡大橋をバックにした、太陽の光を浴びてキラキラと反射する海を一番に思い浮かべる。これは、私が住んでいる明石市だからこそ、日常的に見られる景色なんだと思う。どのような形になるか今は分からないが、この町の海を守っていきたい。そう強く感じた。

あの日から五年がたった現在、私は時折あの日のことを思い出す。今でもあの日の出来事と、あの時貰った本は、私の宝物である。この出来事を、思い出させてくれた「こども海の文学賞」を開催してくださった多くの方々に、厚く御礼申し上げる。そして西谷さん、本と貴重なお話、経験を本当にありがとうございました。

僕が好きな海

明石市立衣川中学校 三年
毛利 勇真

僕は海が好きだ。だけど泳ぐのが得意とかいうわけじゃない。釣りなんて経験もないしサーフィンやダイビングもやったことない。魚は好きだけど、そういう意味で好きなわけでもない。船オタクってのもまったく違う。

僕は静かでつまらない、そんな海が好きだ。

中学2年生の秋、散歩に行くようになった。2学期も中盤、そろそろ進路について考える時期になった。高校がどこだとか成績はどうだとか、皆が口々に騒ぎだす。僕は一人だけ取り残されたような感覚がしていた。そこで散歩に行くことにした。体を動かすのも面倒だし、かと言って家にいれば、勉強と将来のことで頭がパンクしてしまう。端的に、かつ大げさに言うなら、現実逃避がしたかった。

駅前の街に行ってみた。車の駆動音に信号の青を教える電子音。カツカツと音を立てるヒールと楽しそうな話し声、路上演説に路上ライブと騒がしい。夜になれば、道路沿いにキッチリ並んだ電灯と看板が、道を照らす。

一言で言うなら、疲れた。確かに気自体はまぎれた。だけど家に帰れば嫌でも思い出すし、結局何も変わらない。その日はただただ疲れただけだった。

海に行くことにした。どこに行っても川と海が視界に入る明石では、行くのにそう時間もかからない。思い立ったが吉日、僕は早速出かけた。

海、それも寒くなってくる秋ともなると、人通りも少なく、寂しい雰囲気になっていた。サクサクと心地良い音を鳴らす砂浜に、少し荒めの波が耳に響く。砂浜に腰を降ろして、少し遠くに見える淡路島をボーッと眺める。鳥が水上から飛び立って、水飛沫がほのかな夕日を吸い込んで、数瞬淡く光る。フェリーの汽笛がボーと遠吠え、水面を浅く切り開き波を強める。

傍目から見れば、退屈そうに海を見つめる変人だろう。僕自身も、別に楽しいと感じているわけじゃない。初めて感じる、不思議なその感覚が体に染み込んで、心地良かった。

規則的な、絶えることのない波の音。夕日が沈んでいき、少しずつ顔を見せる月と星。時々水面を跳ねる魚に驚いたり、朧気に光る船を追いかけたり、黒く塗り潰されて恐ろしげに見える淡路島のシルエットを見つめたり。そのうち、急に我に返って「なにしてんだろ僕は」と思って家に帰った。

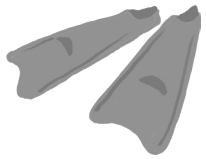
特別なことをしたわけじゃない。ただ海に行っただけだ。それなのに、ずっと重かった肩がフッと軽くなった。よく言うのは「海の広さに比べたら、自分の悩みなんてちっぽけに思えた」というやつだろうか。全然違う。自分のこれからの生き方を決めていく大事な悩みだ。ちっぽけなんて思えるはずがない。

だけど、こんなことができる内はまだまだ大丈夫だろうと、そんな風に思った。水面を跳ねる魚を今か今かと待ちわびたり、一握りの砂利を放り投げて、音を楽しんだりした。そんなちっぽけな事が楽しめるのなら、今はまだ、そんなに辛くないと思えたのだ。

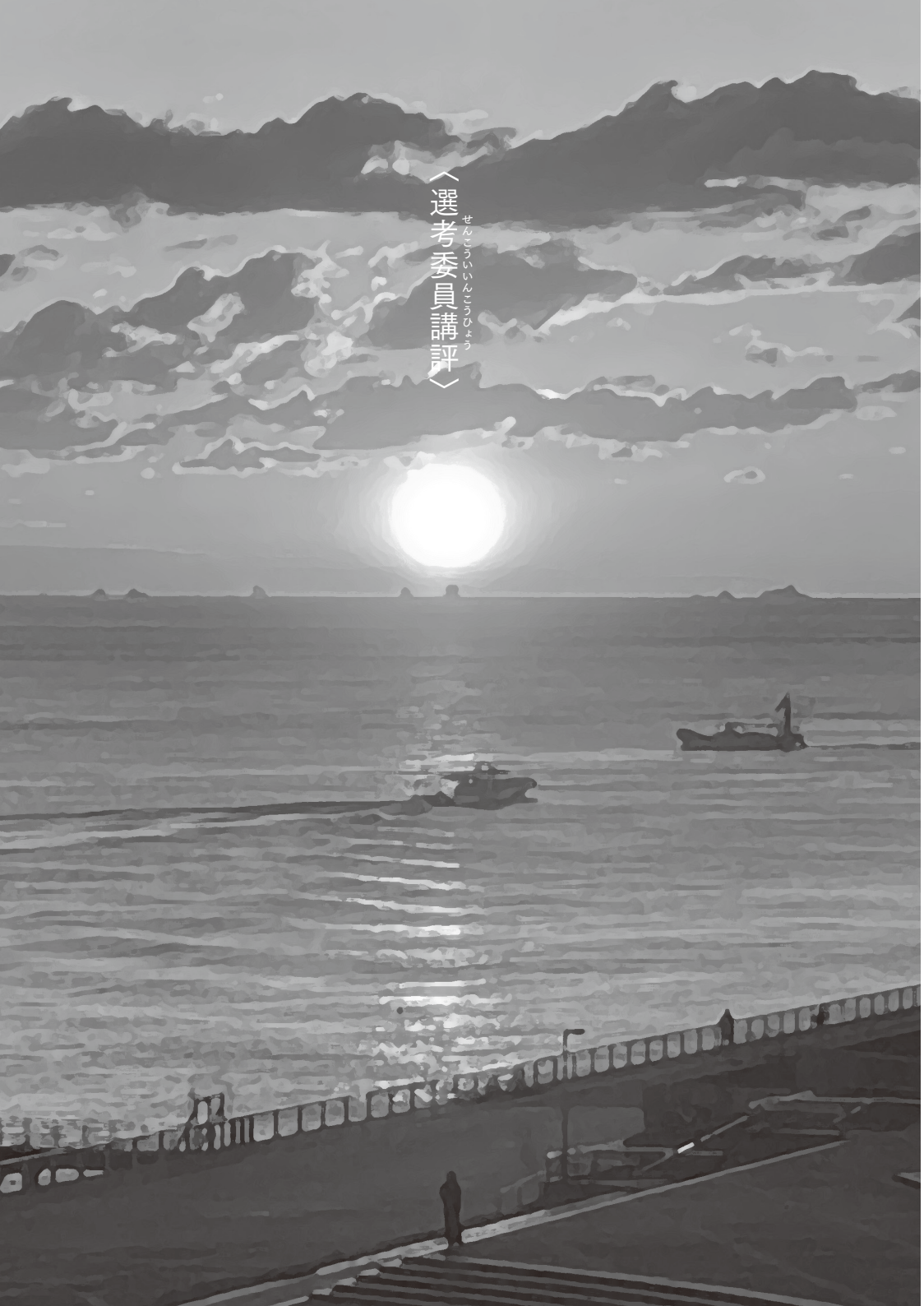
この作文を書いている間にも行った。冷え込んできた十二月、風が思ったよりも強く、厚着してこなかったのを悔やむ。うち寄せる波が意外と深くまで砂浜に食い込んでいた。近くまで来ていた波に手を浸からせる。案外温かかった。濡れた手が、冷たい風のせいで一気に冷える。凍りついたように動きが鈍くなる手が磯臭くならないように、近くの水道で洗う。冬の海は凍てつくように冷たい、という表現は嘘で風のせいなんて、つまらない発見をした。

何も変わらない、つまらなくて、静かな海。綺麗そうな表現をしても、ただの水飛沫だしそこらを通るただのフェリーだ。それだけでしかないのに、何故だか海は魅力的なのだ。明石の海に限った話でもないし、ただの個人的な感想だ。

ただそこに在る、何も変わらない退屈な海。僕はそんな海が、変わらない海が、大好きだ。



〈選考委員講評〉



最相 葉月

ノンフィクションライター

1963年東京生まれの神戸育ち。関西学院大学法学部卒業、会社勤務を経てフリー。科学技術と人間、スポーツ、音楽、精神医療、宗教などを取材。『絶対音感』で小学館ノンフィクション大賞、『星新一一〇〇話をつくった人』で大佛次郎賞、講談社ノンフィクション賞などを受賞。他の著作に『青いバラ』『セラピスト』『証し　日本のキリスト者』など。児童書に『調べてみよう、書いてみよう』。

足を運んで、見て、聞いて、感じたことを書いている作品はやはり強いものです。小学生は非常に面白い作品が並びました。

最優秀賞に輝いた三和さんの「明石うらぎょきょうのたんけん」は、一行目を読んだときから音が聞こえてきて、漁協の活気ある様子や人々の動きが目に浮かびました。驚きと好奇心を持って取材し、一生懸命観察して、知らないことをインタビューしています。買い物して、魚を食べるところまで物語になっていて、命をいただく尊さも伝わってきました。1年生で15枚もの作品を、自分の字で書いていることも素晴らしかったです。

優秀賞は、視点のいい作品が選ばれました。生まれつき目が見えないけれど色を感じることができる向井さんの「海の色」は、一篇の詩のようで、私たちと彼女が見ている色は同じなのか違うのか、不思議に思うと同時に、大変刺激的でした。中林さんの「貝がら大そうどう」は、びっくり仰天したことがリアルに表現されていて、その後ヤドカリの生態を丁寧に調べて書いています。新しい知識を得ていく喜びも、ノンフィクションの魅力ですね。高橋さんの「魚を三枚におろした」は、1時間ほどの短い体験をリズムよく文章にしていて、特別な体験ではなくても書けるという手本になるような作品です。

入賞4作品も、個性と工夫が光っていました。細かいところに入り込んだ書き方がとてもよかったり、豊富なアイデアを提案していたり、光景が目に浮かんで温かな気持ちになったり、関心を持ったことを専門家に記者のように取材していたり。どれも読み応えがありました。

一方で、中学生の作品は、文章を書くというところから大きな課題があると感じました。自分がどう思ったかは、今までに見たり聞いたりした範囲にとどまり、机の上で書いているだけでは非常に狭いものです。ノンフィクションの素晴らしさは、これまで知らなかったことを知り、体験し、人と会い、話を聞いて、その面白さが表現されるところにあります。そういうことから知ってもらいたいと願っています。

今回は残念ながら、最優秀賞は該当なしとなりました。優秀賞となった岸田さんの「アカウミガメの故郷、明石」は、自然の尊さを鮮明に覚えているからこそ、美しい表現になっています。もう

一歩踏み込んで取材をしていたら、ぐんと良い作品になるだろうと感じました。入賞には、原稿がしっかり書けている、いい題材を選べたなど、素質が感じられる作品が入りました。

面白いと思ってテーマを見つけることをきっかけに、ノンフィクションは生まれます。今回、目立ってＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）関係が多かったですが、みんながいいと思うことは誰も反論せず、面白みがありません。机の前に座ったまま美辞麗句を並べるのではなく、むしろ、異を唱えるといった感情を大切にしてください。

第１回の開催となった「こども海の文学賞」。題材である「海」にまつわるテーマは、無尽蔵にいっぱいあります。例えば、船について考えてみただけでも、どんな人たちが乗っているのだろう、中でどんな物を食べているのだろう、どこから来たのだろう、船員になるにはどういう方法があるのだろう……などと、知りたいことが湧き出てきます。これが面白いと思ったところから、取材や調査を始めてみてください。いろんな海のノンフィクションを楽しみにしています。

たなかしん

画家・絵本作家

絵の下地にアトリエのある明石の海の砂を使い、独特のマチエールを生みだす。海砂は波打ち際の細かい部分を使う。そこには、山から運ばれた岩や砂など大地の恵み、海から運ばれた貝殻や珊瑚などの海の恵みが混ざり合う。採取した海砂は塩を洗い流し、天日に干す。そうすることにより、太陽のエネルギーさえもキャンバスに閉じ込める。画家として活動する傍ら２００２年頃から絵本を描き始め台湾の出版社Grimm Pressから絵本作家としてデビュー。以降、国内外で展覧会、出版を重ねている。『一富士茄子牛焦げルギー』で第53回日本児童文学者協会新人賞受賞。

ノンフィクションは、想像では書けません。取材して、調べて、自分の言葉で書く、これは大人でも非常に難しいことではないのかと思っています。「こども海の文学賞」は第１回なので、小中学生でどれくらい応募があるのかなと心配していましたが、３５０通以上が寄せられ、作品自体も本当に素晴らしいものがたくさんありました。

小学生は、自分の言葉で書かれている作品が多かった印象です。最優秀賞を受賞した三和君の

「明石うらぎょきょうのたんけん」は、「1年生でこれだけ書けるのか」と度肝を抜かれました。漁協で行われていることが一目瞭然。音の表現を工夫して臨場感を出し、細かいところまで丁寧に描かれているのに加え、質問して返ってきた答えに対してどう思ったかもしっかり書かれていました。三和君に弟子入りさせてもらいたいくらいです。

優秀賞も、好きな作品ばかりです。向井さんの「海の色」は、宇宙に行ったガガーリンが「地球は青かった」と言ったのと同じくらいの衝撃がありました。いろんな感覚を持った人がいることを気付かせてくれます。中林さんの「貝がら大そうどう」は、笑いながら読みました。「チミチミ」「チョミン」などの擬音が独特で、独創性があり、楽しく書いていることが伝わってきました。高橋君の「魚を3枚におろした」は、読みながらお腹がすいて、よだれが出そうでした。そう感じさせてくれるのは、いい文章だからだと思います。

鯛のことを細かく取材して感じたことをいっぱい書いて、章立てで編集作業までやって完成させた中村君。気になったことをお父さんお母さんにインタビューして、魚が好きだから人にもすすめたいと面白いアイデアをたくさん出した張田さん。お父さんとの思い出を春夏秋冬に分けて、季節ごとに兵庫のおいしい魚を紹介してくれた境さん。真珠からエイの話題まで、ユーモアたっぷりにつづった谷吉さん。入賞した作品も、それぞれ特長があって、楽しませてもらいました。

中学生は、もっと深掘りしてほしいなという印象が残りました。優秀賞に選ばれた岸田君の「アカウミガメの故郷、明石」は、全体的にはよく書けていると思います。だからこそ、疑問点を探して、気になることを調べて、立体的に見て、もっといっぱい書いてほしい。そうしたら、面白かったり、感心したり、知らないことを学ばせてくれたりする読み物になるのではないかと感じました。きっともっといい作品が書けると、大いに期待しています。

自分の内面を見せてくれた毛利君の文章は魅力的でしたが、エッセイっぽい書き方ですので、見たり聞いたりしたことを解釈して、読み手に伝えることを意識したら、ノンフィクションとして素晴らしい作品になるのではないかと思います。ゆいさんも峯岸君も、自分の体験を生き生きと楽しく書けていますので、もう一歩踏み込んで深掘りしてみてください。

応募作品を通して、ノンフィクションをもっと読んでみたいなという気持ちになりました。知らないことはまだまだ世の中にたくさんあります。言葉にしていって、誰かがその文章を読むことで、興味の輪が広がっていき、世界が変わるきっかけになる可能性があります。皆さんの力作から、すごく意味のある文学賞がここに誕生したんだと確信しています。個性あふれる作品をどんどん寄せてください。この賞を一緒に育んでいきましょう。

あとがき

川﨑 喜昭

明石おさかな普及協議会会長

「こども海の文学賞」は2022年の海の日（7月18日）に産声を上げました。

明石おさかな普及協議会は、明石市公設地方卸売市場にある水産の卸業者、仲卸業者、市場と取引している小売店で構成されている団体です。おいしい海の幸をたくさん食べていただくための普及、啓発活動をしています。

2022年秋に明石市で「第41回全国豊かな海づくり大会」が開かれたことも、賞の創設の大きなきっかけとなりました。多くの方に支えられ、助言をいただき、子どもたちに海や魚に親しんでもらいたい、文章で表現してほしいと企画。体験、観察、調査、取材した事実を、自分の言葉で伝える「ノンフィクション」を募集しました。

夏休みには、卸売市場と明石浦漁業協同組合で見学会を実施し、書き方の講座も開きました。競りの様子に目を輝かせ、海の生き物に興味を抱き、関係者に積極的に質問する子どもたちの姿に、明るい未来と無限の可能性を感じました。

とはいえ、正直申しますと、初めての試みで作品が集まるかどうか不安でいっぱいでした。それが、ふたを開けてみますと、小学生256点、中学生103点、計359点もの作品が寄せられ、地元の明石をはじめ、日本各地、海外はベルギーからも力作が届きました。子どもたちの感じる「海」を、大人の私たちが知る機会にもなり、これからの豊かな海づくりのヒントもたくさんもらっています。挑戦して応募してくださり、ありがとうございます。

小学生の部の最優秀賞には、三和倫太郎さんの「明石うらぎょきょうのたんけん」が選ばれました。競りの光景が生き生きと書かれていて、感動で胸がいっぱいになりました。ほかにも、小学生の部で7作品、中学生の部で4作品が優秀賞や入賞を受賞し、この作品集に収めています。感性がきらきらと光る作品を、子どもも大人も多くの方々に読んでいただければ幸いです。

最後になりましたが、選考委員の皆様、協賛や協力の団体・企業、講座開催や告知等で関わってくださった人たち、応募を取りまとめてくださった学校関係者はじめ、立案、実施にあたりご尽力いただいたすべての方々に厚く御礼申し上げます。

海のように広く、深く、豊かに、この賞を皆様と共に育んでいけたらと願っております。

第1回こども海の文学賞作品集
明石うらぎょきょうのたんけん

2023年7月1日 第1刷発行

発行　明石おさかな普及協議会
表紙挿絵　涌田千尋
装丁　北原和規（UMM）
協力　明石市漁業組合連合会
　　兵庫県漁業協同組合連合会
　　明石市立図書館
　　株式会社ペンコム
　　株式会社ライツ社

こども海の文学賞HP
https://www.akashi-osakana.org/bungaku/

本書の無断転載・複製を禁じます。